

聖書：創世記 16：1～16

説教題：見て、聞いてくださる神

日時：2023年7月30日（朝拝）

前の創世記 15 章は創世記全体の中でも重要な章でした。特にその 6 節にこうありました。「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた。」このように信仰によって義と認められたと言われたアブラムが、今日の 16 章で大変な失敗をしてしまいます。一言で言えば不信仰の歩みです。つまり一度信仰を持って義と認められれば、後はスーッとうまく行くのではないということです。信仰の父と言われたアブラムも、そこから落ちることがあったのです。その彼の姿を見ることを通して、私たちも自分に当てはめ、益となることを受け取って行きたいと思います。

さてまずここで動いたのはアブラムの妻サライです。彼女はアブラムに子を産んでいませんでした。11 章 30 節に「サライは不妊の女で」と言われていた通りです。主からの召命を受けたアブラムとともに歩いて来ましたが、この時点でもまだ子がありませんでした。カナンへの地に来てから 10 年が経過していました。そこで彼女がアブラムにこのように言います。2 節：「サライはアブラムに言った。『ご覧ください。主は私が子を産めないようにしておられます。どうぞ、私の女奴隷のところにお入りください。おそらく、彼女によって、私は子を得られるでしょう。』」子が生まれない場合、女奴隷を通して子をもうけることは当時の世界では一般的に行われていたことでした。サライはこれ以上待つことに耐えられなくなり、世の一般的方法によって子を得ることをアブラムに提案します。このままでは自分の立場がなくなってしまう。早くに自分の子を持ちたいと彼女は願ったのです。

それに対してアブラムはどう応答したのでしょうか。2 節後半に「アブラムはサライの言うことを聞き入れた」とあります。果たしてこれは良いことだったのでしょうか。多くの方が指摘することは、ここにエデンの園におけるアダムとエバの罪と同じパターンが見られるということです。アダムはエバの言葉に従いました。エバが持って来た禁断の実を受け取り、それを食べてしまいました。本来アダムには頭としての責任がありました。禁じられた木の実を食べたエバに対して、「それはダメではないか。神は食べてはならないと命じておられたではないか。神を愛し、信じて歩むべきではないか」と語り、エバを正しく導くべきでした。ところがアダムは彼女の提案に従って

しまいました。ここでも同じです。アダムはサライの提案を受け入れ、サライが連れて来たエジプト人ハガルを受け入れてしまいました。アブラムはきっこう考えたのでしょうか。創世記 15 章で「私の家の相続人は、ダマスコのエリエゼルなのでしょうか」と主に問うたところ、主は 4 節で「その者があなたの跡を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出てくる者が、あなたの跡を継がなければならない」と言われ、私から生まれ出る者が約束の子であるとはっきり示された。しかし妻サライを通して、とは言われなかった。つまりそういうことだったのではないか。彼女でなくても、世で行われている通り、女奴隷を通して与えられる子が約束の子となることを主は御心としておられるのではないか。神はそのことをサライの口を通して私に教えてくださったのではないかと。アブラムは彼女の言葉を受け入れ、それに従いました。その結果、ハガルは身ごもります。アブラムの家には大きな喜びと希望が満ち溢れたことでしょう。

ところがでした。その喜びも束の間、思わぬ事態がアブラム家に生じ始めます。何と女奴隷のハガルは、自分が身ごもったのを知って女主人サライを軽く見るようになったのです。サライにとっては耐えがたい屈辱の日々となります。そこで彼女は 5 節でアブラムにこう言います。「私に対するこの横暴なふるまいは、あなたの上に降りかかればよいのです。」 私たちは一瞬驚いてしまいます。これはサライの提案によることだったのではないのでしょうか。ですから責めるならまず自分自身を先に責めるべきではないのでしょうか。しかし彼女としては、とにかくこの怒りを誰かにぶつけずにはいられなかった。そこでアブラムを責めたのです。あなたがあのハガルを甘やかしているから悪いのです！これはあなたの管理不足のせいです！あなたがもっと毅然とした態度を取らないから彼女はあのように付け上がっているのです！と。そして言います。「主が、私とあなたの間をおさばきになりますように。」 こんな怒りに任せた言葉の中に軽々しく主の名を持ち出して良いものなのでしょうか。反対から言えば、主の名を持ち出しながらこんな風にアブラムだけ一方的に責めることはできるのだろうか、とクエスチョンマークが付きませんが、サライはこう言わずにいられない精神状態だったのでしょうか。

アブラムはこれに対してどう応答したのでしょうか。彼は 6 節で「見なさい。あなたの女奴隷は、あなたの手の中にある。あなたの好きなようにしなさい」と言います。一家の長として問題の解決に努めるべきところ、彼はその責任を放棄します。あなた

の好きなようにしなさいと。そこでサライはハガルを苦しめたとあります。あのサライもこの時ばかりはどんなに怖い顔だったことでしょうか。彼女はハガルを厳しく扱ったのでしょう。その結果、ハガルはそこから逃げざるを得なくなります。果たして悪いのは誰なのでしょう。結論から先に言えば全員です。アブラムも悪いし、サライも悪いし、ハガルも悪い。しかし一番立場が弱いハガルが最もひどい扱いを受けることになります。彼女はこの家から追い出されるという仕打ちを受けることになったのです。これが人間の知恵と力で事を行おうとしたことの結果です。今回の方法は当時の世の中で一般的に認められていたいわば常識的な方法だったかもしれません。しかしそれは神がよしとされる方法ではありませんでした。何よりも今回の方法は信仰の歩みと矛盾するものでした。アブラムとサライは信仰によってではなく、人間的な方法と力で神の約束を実現しようとしてしました。神に信頼し、神が与えてくださるものを待ち望むのではなく、人間の考えに基づき、人間の力で神の御心を実現させてしまおうとしました。しかしそれはかえって災いを彼らの家にもたらすこととなったのです。一層問題を複雑にし、想像もしなかった苦しみを自分たちの上に招く結果となったのです。

さて7節以降には追い出されたハガルに対する主の関わりが述べられています。ハガルは自分の出身地エジプトへ向かう途上にあつたようですが、そんな彼女に主の使いが語りかけました。8節：「サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか。」すると彼女は言いました。「私の女主人サライのもとから逃げているのです。」そんな彼女に主の使いは「あなたの女主人のもとに帰りなさい。そして、彼女のもとで身を低くしなさい」と言います。考えてみればハガルにも問題があつたのです。ある意味で彼女が高ぶつたことが彼女が今こうあることの原因でした。ですからサライのもとに帰って身を低くしてやり直しなさいと主の使いは言います。また彼がそうすべきであると語つたのは、アブラムの家にこそ主の祝福はあるからでしょう。そこから離れてエジプトへ行くのではなく、アブラムのもとにとどまりなさい！と。

そして彼女に励ましの言葉を語ります。10節：「また、主の使いは彼女に言った。『わたしはあなたの子孫を増し加える。それは、数えきれないほど多くなる。』」さらに11節：「見よ。あなたは身ごもつて男の子を産もうとしている。その子をイシュマエルと名づけなさい。主が、あなたの苦しみを聞き入れられたから。」「イシュマエル」という名は主が与えてくださった名です。そこには印がついていて、欄外の注

を見ると「神は聞く」の意とあります。主は彼女の苦しみを聞き入れてくださいました。そのイシュマエルについて12節に「野生のろばのような人となり」とあります。これは他の人と協調するのではなく、独立して歩む人を指す表現のようです（ホセア書8章9節：「彼らは、ひとりぼっちの野ろばで、アッシリアへ上って行った」）。ですから12節の残りの部分に「その手は、すべての人に逆らい、すべての人の手も、彼に逆らう。彼は、すべての兄弟に敵対して住む」と言われています。彼と彼の子孫は周りの人々と平和に暮らす人々とはならないのです。それでも母親のような奴隷ではなく、自由に生きる人となる。しかも大きくなる。ハガルにとってはそれで十分だったのでしょう。

彼女はこの経験を経て自分に語りかけた主の名を「あなたはエル・ロイ」と呼んだと13節にあります。エル・ロイという言葉は「私を見てくださる神」という意味です。彼女はこんな奴隷の私をも神が見ていてくださったという事実に関心から喜びと慰めを受けたのです。そしてそのように私を見てくださる神を私自身も見ることができた。その後ろ姿を見た。これは実際に神の後ろ姿を見たというよりも、神ご自身の臨在に直接触れたということを行っているものと思われます。この恵みと憐みに満ちた神に直接触れることが許された。なのになおこうして生きていくことができるのは！と彼女は驚きと感謝を表現したのでしょう。また、このためにこの井戸はベル・ラハイ・ロイと呼ばれたとあります。これは「生きて私を見てくださる方の井戸」という意味です。今日も生きていて、私を見てくださる方、そして私を守ってくださる方がおられる。この井戸はそのような神とハガルが会ったことを記念する井戸となったのです。こうしてハガルは励まされてサライのもとへと帰ります。

最後の15～16節にはハガルがアブラムに男の子を産んだことが記されます。アブラムは事の顛末を聞いて、生まれた子にその通り、イシュマエルと名付けます。注目すべきはここにサライの名がないことです。サライは最初、ハガルを通して得た子を自分の子にしようとしました。2節の「おそらく、彼女によって、私は子を得られるでしょう」という言い方は、その子を私の子とするという意味です。しかしサライの名は、この章最後の15～16節には出て来ません。イシュマエルはアブラムとハガルの子とのみ言われています。サライの願った通りには事は運ばなかったのです。この時、アブラムは86歳であったと書かれています。75歳でハランを出発し、カナンに来てから11年経ちました。さてこの後どうなるのでしょうか。ここに年齢が記され

たのは、次の 17 章 1 節との比較のためであると思います。アブラムは随分待ちましたが、神のご計画実現のためにはさらに神の時を待つことが求められたのです。

今日の章の驚きは前半にアブラムとサライの失敗のことが記されましたが、後半にそれ以上のスペースを割いてハガルのことが多く記されていることではないでしょうか。エジプトの女奴隷に神はここまで関わられるのかと私たちは思うかもしれませんが、しかしそこに今日の箇所の特徴があるように思います。神は苦しみの中にいる者、虐げられている者、弱い立場にある者、貧しい者を心にかけてくださる神です。詩篇 145 篇 9 節：「主はすべてのものにいつくしみ深く、そのあわれみは造られたすべてのものの上にあります。」 私たちはそのような神のお姿をハガルとともに改めて驚きをもってよく見つめるべきです。そしてそのことを通してましてや神の民に対して神はそうにあられるということを思い、確信すべきではないでしょうか。今日の箇所を読んで思い起こされるのは、後にエジプトで苦役の下にあったイスラエルを神は見、またその叫びに聞いてくださったという御言葉です。出エジプト記 3 章 7 節：「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみを確かに見、追い立てる者たちの前での彼らの叫びを聞いた。わたしは彼らの痛みを確かに知っている。」 今日の箇所で主は、いわば神の民に苦しめられていたエジプト人の奴隷を顧み、その叫びを聞いてくださいましたが、後にはエジプト人によって苦しめられていた神の民を見つめ、その叫びを聞いてくださいます。そしてそのように見て、聞いておられる神として、力強い御腕をもって神の民を救い出してくださいます。このような神のお姿を私たちは今日の箇所に認め、それを自分たちに当てはめて、一層この神への信仰を強くされ、困難な状況の中でも、この主への信仰によって生きると励まされるべきではないでしょうか。

エジプト人の女奴隷ハガルはアブラムの家に帰って来て、神は見て、聞いてくださる方であることを証しました。そしてアブラムは彼女から聞いた通り、「神は聞く」という意味のイシュマエルという名を生まれた子どもに付けました。アブラムとサライはイシュマエルの名を呼ぶたびに、あるいは彼の名が呼ばれるのを聞くたびに、神は聞いておられるというメッセージを受け取ることになったのではないのでしょうか。彼らは神が見て、聞いておられる神であることを忘れ、その信仰から外れたために、今回の過ちに陥りました。しかしそのために追い出してしまったハガルに主は現れて、「神は聞く」という名をその子どもに与えて、この家に送り返されました。アブラム

私たちはこの名を口にするたび、耳にするたびに自分たちが犯した罪を悔い改め、もう一度この神に信頼して歩むようにとのチャレンジを受けたのではなかったでしょうか。

私たちもこの「見て、聞いてくださる神」を見上げて歩みたいと思います。私たちもアブラムやサライのように我慢できなくなり、人間的な方法を使ってでも事を成し遂げたいと思う状況にあるかもしれません。あるいはハガルのように自分の罪の行いもあって、砂漠のような場所で苦しんでいるかもしれません。しかし神はあのハガルをも見ておられ、その叫びに聞いてくださった神です。とするなら、この方から目を離して人間の知恵と力で歩もうとするのではなく、今日も私を見ておられ、その祈りに聞いてくださる神に信頼を置き、この神に従う歩みこそを第一に選び取る者でありたいと思います。神が備えてくださっている祝福にあずかるためには、神の方法に従い、神の時に委ねることが大切です。この方に従うのとは別の道を行って祝福を受けよ！と勧めるサタンの提案に従うことがありませんように。ハガルは神は「見て、聞いてくださる神」との福音を持って帰って来ました。私たちもこの神を見上げて信頼し、この神に祈り、この神が定めてくださった最も良い時に神の方法により、神が備えてくださった最高の祝福にあずからせていただく、そういう信仰者の歩みとその幸いへ導かれて行きたいと思います。